

高知県における絵金のメモレイション

小 松 秀 雄

Commemorations of Ekin in Kochi Prefecture

KOMATSU Hideo

要 旨

高知県では大きな芝居絵屏風を飾る夏祭りが行われ、土佐の夏の風物詩として地域の人びとに親しまれている。芝居絵屏風は大きな二曲一隻の屏風であり、幕末の絵師・金藏（1812-1876）、通称、絵金が芝居絵屏風を描き始めた。日本の近代化の過程で娯楽の多様化にともない、夏祭りで芝居絵屏風を飾ることは少なくなったが、1960年代の時代背景の下で再び注目されるようになった。それから間もなく、高知県赤岡町では、1977年に絵金没後100年を記念するコモレイションとして絵金祭りが行われた。赤岡町では1993年に土佐絵金歌舞伎伝承会が結成され、さらに、2005年には絵金の作品を展示する絵金蔵も造られた。高知県立美術館では、2012年に、絵金生誕200年を記念するコモレイション「大絵金展 極彩の闇」が開催された。本稿では、集合的記憶の社会学の視点から、絵金のコモレイションに関する多様な資料を分析し論述してみる。

キーワード：絵金、芝居絵屏風、コモレイション、集合的記憶、社会学

Abstract

Some locales of the Kochi Prefecture hold summer festivals to display Shibai-e screens; a Tosa summer tradition. Shibai-e screens are large two-panel folding screens painted by the artist Kinzo (1812-1876), popularly known as Ekin in the last days of the Tokugawa shogunate. During Japan's modernization process, the diversification of popular amusements resulted in a decline in the number of summer festivals that exhibited Shibai-e screens. However, due to the historical context of Japan in the 1960s, Ekin and his works returned to the public limelight. Shortly afterward, in 1977, the Ekin festival was organized in Akaoka, town in Kochi Prefecture, to commemorate the 100th Anniversary of Ekin's death. In 1993, the Tosa Ekin-Kabuki Denshokai Association was formed by the locals interested in the preservation of Shibai-e screens. In addition, in 2005, the "Ekingura" (Ekin Memorial) was constructed in Akaoka to exhibit Ekin's works. In 2012, the Museum of Art, Kochi, proudly presented "Ekin: The Variegated Darkness" to commemorate the bicentennial of Ekin's birth. This paper analyzes and discusses various materials on the Ekin's commemorations from the perspective of sociology of collective memory.

Keywords: Ekin, Shibai-e screens, commemoration, collective memory, sociology

はじめに

高知県の地域の夏祭りに飾られる芝居絵屏風は、幕末の絵師・金藏、通称、絵金（1812-1876）が描き始め、その後は弟子たちなどが受け継いで昭和初期まで描かれたと伝えられている。幕末から明治初期にかけて「ブーム」となり、土佐藩の各地の夏祭りに飾られたけれども、近代化の潮流のなかで日本の多くの民俗や伝統行事と同様に次第に姿を消していった。絵金の死後約100年ほど経った1970年前後になり、再び芝居絵屏風が注目され、「絵金ブーム」が到来した。筆者は、『神戸女学院大学論集』第66巻第2号において歴史社会学的視点から「絵金ブーム」の背景や特徴を中心に考察した¹⁾。

「絵金ブーム」後の重要な動向については、上記の号の「5 おわりに」でごく簡単にまとめてみたので、今回は集合的記憶の社会学の視点から、その動向の特徴を絵金のコメモレイション（記念・顕彰行為）として把握し、考察してみたい。「絵金ブーム」後の絵金のコメモレイションには、さまざまな事例が見られるが、紙幅の都合などを考えて高知県香南市赤岡町と高知県立美術館の重要なコメモレイションに焦点を当て考察する。

1 コメモレイションの理論的枠組みをめぐって

赤岡町と高知県立美術館のコメモレイションの事例を取り上げる前に、コメモレイションに関連する集合的記憶の社会学の理論的枠組みをはじめとして、民俗学におけるフォークロリズム、歴史学や人類学における「伝統の創造」などの諸問題を再検討しておこう。いずれも、近年の人文・社会科学で注目されている枠組みや問題である。

（1）コメモレイションの研究

筆者は、滋賀県彦根市の大老井伊直弼のコメモレイションと京都市の平安遷都記念祭の歴史社会学的考察を『神戸女学院大学論集』に発表したことがある。その際に事例研究の理論的枠組みとなる欧米や日本のコメモレイションの学説についても再考したので、ここでは、必要な範囲でコメモレイションの基本的事項に限定して言及することにしよう²⁾。

1990年代後半から日本でもコメモレイションの研究を人文・社会科学において数多く見かけるようになってきた。コメモレイション（commemoration）という外国語には、日本では記念・顕彰行為の訳語が使われているが、人間や事物や出来事などを対象とする記念・顕彰、慰霊・追悼などの幅広い現象に適用できる。また、コメモレイションには、「共に記憶すること」などの意味も含まれているから、集合的記憶に関連する社会文化的現象にもなる。昔から記憶の研究は人文・社会科学だけでなく医学や生物学などの自然科学の分野でも盛んに行われてきたが、1984年から1992年にかけてフランスで刊行された『記憶の場』（3部構成の全7巻）が近年における人文・社会科学の「記憶研究ブーム」の火付け役となったと考えられる³⁾。『記憶の場』には、主に近代から現代までのフランスにおける多彩なコメモレイション（フランス語

ではコメモラシオン)の100編以上の研究報告が万華鏡のように散りばめられており、編集を主導したピエール・ノラは序論として「記憶と歴史のはざまに」、および、締めくくりの論文として「コメモラシオン(記念・顕彰行為)の時代」を執筆している。

『記憶の場』の日本語訳はフランス語版の多数の論文から取捨選択されたうえで、2002年から2003年にかけて刊行されたが、それ以前に阿部安成他編『記憶のかたち』(1999年)、羽賀祥二『史蹟論』(1998年)、岩波書店『思想 特集 記憶の場』(2000年)などの研究が発表され、日本の「記憶研究ブーム」の先導役となった⁴⁾。近年のコメモレイション研究の特徴として、近代国家の統合や強化、あるいは、地域社会の活性化や観光などの問題提起を指摘できるだろう。『記憶の場』には、普仏戦争敗北後の第三共和制をめぐる国家の統合やフランス革命100年祭をはじめとしたフランスのコメモレイション(コメモラシオン)の事例研究が数多く含まれており、また、『史蹟論』や『記憶のかたち』には、明治時代の日本の近代国家と地域社会をめぐるコメモレイションの事例研究が掲載されている。

(2) 集合的記憶の社会学

日本だけでなく海外のコメモレイションの研究には、何かを記念したり、誰かを顕彰したり、死者を慰霊したり追悼したりする多種多様な事例の報告があるが、キーワードは記憶(memory)である。すでに指摘したように、古くから自然科学と人文・社会科学では記憶の研究が行われており、例えば現代の最先端の分子生物学や神経科学の分野では、専門外の者には容易には理解できない細部まで記憶のしくみの解明が進んでいる⁵⁾。本稿では、脳内の器官や神経のレベルにおける個人の記憶のしくみではなく、社会学の視点から集団レベルにおける人びとの集合的記憶にスポットを当ててみたい。

「記憶研究ブーム」のなかで、集合的記憶の最も重要な社会学的研究成果として注目されているのは、フランスのモーリス・アルヴァックスの『記憶の社会的枠組み』(1925年)と『集合的記憶』(1950年)である⁶⁾。これら2冊の研究成果は20世紀前半の研究であり、自然科学の最新の記憶研究に比べると古い印象があるけれども、最新の科学の盲点となっている集合的記憶のしくみの解明を試みた貴重な研究である。ここでは、アルヴァックスの集合的記憶論全体の理論的考察を行うことはできないので、2020年春に刊行された金瑛『記憶の社会学とアルヴァックス』を主たる参考文献としながら、コメモレイションの研究に関連する範囲で特筆すべき知見を取り出しておこう⁷⁾。

一般に記憶の過程は、何かを記憶する記銘(獲得)の段階、記憶したことを覚えておく保持の段階、記憶したことを思い出す想起の段階という3つの段階からなる。個人の記憶の過程については、3つの段階は分かりやすいのに対して、集団レベルでの集合的記憶の過程については、常識的に考えると理解できない、あるいは、想像することが難しい部分もある。集合的記憶の保持は集団の記録の形で想定できるのに対して、集合的記憶の記銘や想起を想定できるのか。「家族や学校や会社という集団が覚えたり、思い出したりする」とは、どういうことなのか。このような疑問や難問に対して、アルヴァックスは、心理学などの個人主義的視点ではなく、当時のフランス社会学を主導したエミール・デュルケームの集合主義的視点からアプロー

チし、集合的記憶の理論を構想した⁸⁾。

デュルケームは、個人の認識や思考などの社会的側面に対して社会的事実、集合表象、集合意識などの概念を適用し、社会学の研究対象とした。デュルケームは、経済、自殺、宗教、法律、道徳などのさまざまな社会的事実や集合表象を研究し、偉大な業績を残したけれども、自己の社会学的方法の規準にこだわり、あえて記憶を研究することはなかった⁹⁾。それに対して、最も優れた後継者の一人ともいえるアルヴァックスは、集合主義の立場から記憶の研究に果敢に挑戦した。当初はアンリ・ベルクソンの哲学に傾倒していたアルヴァックスは、個人主義の立場に立つベルクソンの記憶の哲学を批判的に再考しながら、集合主義の立場から独自の記憶の社会学を構想した¹⁰⁾。すなわち、集合表象としての記憶の社会的側面に焦点を当てて、集合的記憶の特質を解明しようと試みた。彼の記憶研究の2冊の主著のタイトルにあるように、現在の出来事を記憶したり過去の出来事の記憶を再構成したりする際の社会的枠組み（言語・時間・空間などの共有の枠組み）について、家族、宗教、地域社会、社会階級（多様な身分や職業階層）の集合的記憶を事例にしながら丹念に論述している。

例えば、同じ家族であれば、共有する枠組みに基づいて家族の出来事を記憶し、家族の共通の思い出として保持しつつ、後になってお互いの記憶を照らし合わせながら集合的記憶として想起することもできるだろう。もちろん、長い時間が経過すると、家族のメンバーが死亡や結婚や出生などによって入れ替わり、共通の思い出を保持したり想起したりすることも難しくなるから、家族の集合的記憶も少しずつ変化することになる。家族の集合的記憶を保持したり伝達したり想起したりするためには、家族の写真や系譜、仏壇やお墓、家族に関連する冠婚葬祭が重要な手段となるだろう。本稿のタイトルを借用すると、家族のコメモレイションと名づけてもよい記念・顕彰、慰霊・追悼などの活動は家族の集合的記憶の過程を構成する契機となる。(1)で指摘したようにコメモレイションには「共に記憶すること」という意味も含意されているので、やはり集合的記憶に密接に関連する活動といえよう。

アルヴァックスは家族の他に、宗教、地域社会、社会階級の集合的記憶について詳しく論述しているが、紙幅の都合上、これ以上の事例を取り上げることは控えたい。また、アルヴァックスの記憶研究とアルヴァックス解釈の問題点の批判的再考も、既述の金瑛『記憶の社会学とアルヴァックス』を手がかりにしながら、機会を改めて試みることにする。

(3) フォークロリズムと伝統の創造の問題

記憶論やコメモレイションの研究は歴史学や社会学だけでなく、現代の民俗学や文化人類学でも盛んに行われているが、本稿に関連する範囲でフォークロリズム (folklorism) と伝統の創造 (invention of tradition) の問題に触れてみたい。

フォークロリズムの議論は、1960年代のドイツの民俗学で問題提起されたフォークロリズム (folklorismus) に端を発しているが、「伝統的な民俗文化が近代化の中で再編され、二次的な場で用いられる状態を指示していた¹¹⁾。フォークロリズムの議論より少し遅れて、1970年代にイギリスの人類学と歴史学で「創られた伝統」というテーマの研究発表が行われ、1983年に『創られた伝統』の本が公刊された。その後、フォークロリズムと同様に、「創られた伝統」

のテーマは、伝統の創造の問題としてアメリカや日本でも議論されるようになった。その議論の趣旨は、「ずっと昔から存在していると考えられがちな『伝統』は、実は最近になって何らかの目的のために『創造された』ものが多い」¹²⁾ ということである。1960年代以降、フォークロリズムや伝統の創造をめぐる研究では、伝統とは、民俗とは、伝統的文化とは、伝統的民俗文化とは何かが改めて問われることになった¹³⁾。

近年では、日本に限らず世界各地で観光目的や地域の活性化のために伝統的文化、あるいは、民俗文化が活用され、観光客や現代人の好みに合わせて再構成されたり、極端なケースでは、新しい形に作り変えられることもある。伝統や民俗文化の発見（再発見）、あるいは、本物の（真正な）伝統や民俗文化というキャッチフレーズで注目されることも少なくない。ただ、近代の活字文化に加えて、新しい電子メディアが浸透すると同時に、生活全体が目まぐるしく変化する現代社会においては、古くから伝承されてきたといわれる文化でも新しい視点から眺められられたり、何らかの要素が付加されたりすることはやむを得ない。大切に保存されてきた芸術作品については、本物（ほんもの）と偽物（にせもの）を区別することが必要なケースもあるけれども、多くの伝統や民俗文化が活用され、多くの人びとの生活に役に立ち、より良い社会の発展に貢献できれば、それに越したことはない。それは、新しい伝統や新しい民俗文化の創造として評価できるだろう¹⁴⁾。

記念・顕彰、慰霊・追悼の活動としてのコメモレイションにもさまざまな事例があり、伝統文化や民俗文化に分類されるケースも少なくない。歴史上の偉大な人物を記念・顕彰するコメモレイションとしての建造物や行事や出版なども時代の流れに合わせて変わることもあるだろう。例えば、絵金のような芸術家の新しい資料や作品が発見されたり、あるいは、解釈が変更されたり文化財に指定されたりすると、記念館にはより多くの展示物が並べられたり、記念作品集の内容が以前とは異なったりすることもある。次の2と3では、1970年前後の「絵金ブーム」後の絵金を記念・顕彰する代表的活動として赤岡町の土佐赤岡絵金祭り、土佐絵金歌舞伎伝承会、絵金蔵、および、高知県立美術館が開催した絵金の大規模な展示会を取り上げるが、いずれも絵金のコメモレイションであると同時に、地元の活性化や観光に貢献する非常に重要な活動でもある。

2 高知県香南市赤岡町における絵金のコメモレイション

高知県香南市赤岡町は高知県東部の西の入口に位置しており、2006年の市町村合併前までは日本でも最小規模の面積（約1.64平方キロメートル）の自治体であった。とはいえ、近世の土佐藩の時代から明治時代までは非常に繁栄した、海岸沿いの在郷町であり、大正から昭和にかけて赤岡の人びとは近代化の荒波にもまれながらも、豊かな在郷町の商人の心意気を忘れずに受け継いできた。土佐藩家老桐間家の御用絵師だった絵金は、30歳のころ贋作事件によって高知城下から追放され各地を流浪したけれども、50歳のころ赤岡の親族を頼って落ち着いてからは、町絵師として芝居絵屏風などの傑作を描き続けた。そのような歴史的背景を持つ赤岡町は現代の絵金のコメモレイションの最も重要な拠点となった。

(1) 土佐赤岡絵金祭り

1970年前後における「絵金ブーム」が少し落ち着いたころ、1977年から高知県香南市赤岡町では、須留田八幡宮（須留田神社）の7月の「夏祭り＝神祭（じんさい）」の約1週間後、7月第3土曜・日曜日に新たに土佐赤岡絵金祭りを行うことになった。既存の須留田八幡宮の「夏祭り＝神祭」にも絵金の芝居絵屏風は奉納物として飾られたのに対して、土佐赤岡絵金祭りは神社の祭礼とは異なり、文字通り「絵金」の名前を冠した「絵金のコメモレション」であった。須留田八幡宮以外にも、高知市の朝倉神社、須崎市の八幡宮、南国市の片山神社、安芸市の東浜八幡宮の夏祭りには芝居絵屏風が毎年、祭礼の奉納物として飾られるが、絵金を記念・顕彰するコメモレションではなかった。その点で、土佐赤岡絵金祭りが「絵金のコメモレション」としての初めての祭礼となった。

土佐赤岡絵金祭りが生まれた背景や事情については、高知新聞や地元の広報誌などでも言及されているが、『赤岡町史 改訂版』の「絵金祭り」の部分が最も要領よく記述している。それを中心に他の関連資料も参考にしながら、コメモレションとしての土佐赤岡絵金祭りの特徴を取り出してみよう。最初に、記念祭の特徴を表している『赤岡町史 改訂版』の「絵金祭り」の文章を引用する。

絵金没後一〇〇年を控えて、絵金保存会と赤岡町商工会を中心に、祭区ごとに飾られていた絵金の屏風絵を一堂に公開する祭りとして興されたのが、絵金祭りであった。開催日は須留田神社の夏祭り（七月十四・十五日）直後の土・日曜日と決まり、どろめ祭りとともに赤岡町の二大祭りの一つとなる絵金祭りがスタートした。

（赤岡町史編纂委員会 2009:689）

引用文の冒頭の「絵金没後一〇〇年を控えて」に注目すると、1876（明治9）年3月8日に絵金が亡くなっているから、一般的にいえば1977年前後に没後100年祭が行われることになる。その約10年ほど前に始まった「絵金ブーム」を背景にして、絵金が町絵師として華々しく活躍した赤岡の町で絵金保存会や商工会などが没後100年を契機に「絵金のコメモレション」としての祭りを立ち上げた。また、引用文の結びの文章にも注目すると、没後100年の記念祭の形でスタートした絵金祭りは、『赤岡町史 改訂版』では、どろめ祭りとともに赤岡町の「二大祭り」として町の最も重要なイベントの位置づけを与えられている。どろめは赤岡町特産のイワシの稚魚のことであり、観光の柱として売り出す目的で1959（昭和34）年から祭りが始まり、1980年代前半までは秋の観光シーズンの11月に行われていたが、坂本龍馬生誕150年に当たる1985年からゴールデンウィークの幕開けの4月最終日曜日に変更された。

残念ながら筆者はどろめ祭りを見たことはないが、2018年と2019年の夏、土佐赤岡絵金祭りを拝見し、そのときに集めたりフレット『土佐赤岡絵金祭り』では町史とは別の視点から現在の祭りの概要が説明されているので、少し長くなるが、冒頭の「土佐赤岡絵金祭りへようこそ」の興味深い文章を引用する¹⁵⁾。

もともと赤岡の北部、須留田八幡宮で行われていた神祭（じんさい）にならい、幕末より町に伝わる絵師金藏・通称絵金の芝居絵屏風を商店街に並べながら、ビアガーデンや屋台、コンサートなど、さまざまな催しを行っています。現在、土佐赤岡絵金祭り運営を担うのは、屏風絵の所蔵家や商店主、商工会や絵金藏、弁天座等団体が構成する土佐赤岡絵金祭り実行委員会。毎年、出し物の内容や販売品について、議論を重ねながら運営にあっています。また商店はじめ多くの地域企業・団体や個人の方からの寄付によって支えられています。赤岡町に伝わる絵金の芝居絵屏風二十三点は、平成二十一年、高知県保護有形文化財に指定されました。近年絵金祭りでもグッズの制作・販売などを通じ、作品を守る取り組みにも力を入れています。（「土佐赤岡絵金祭りへようこそ」）

引用文からは、行政主導ではなく、赤岡町の住民や関係団体が総力を結集して土佐赤岡絵金祭りを実施していることが分かる。日本でも面積が最小規模で人口2,600人前後（2020年8月現在）の町であるが、盛大なイベントであり、とりわけ間近で20点あまりの大きな芝居絵屏風を見ることができるため遠方からの見物客も数多く来場し、現場で見学した筆者にも彼らの熱意が伝わってきた。

（2）土佐絵金歌舞伎伝承会

2018年7月の「第42回 土佐赤岡絵金祭り イベントのご案内」には、21日・22日のタイムスケジュール、イベントの実施場所、芝居絵屏風の配置図などが分かりやすく図示されており、祭りの全体を見渡せる便利なチラシ（図を参照のこと）である。多種多様なイベントやお店が出ているが、商店街の通りと絵金藏における芝居絵屏風の展示、ならびに、弁天座の絵金歌舞伎公演が「絵金のコメモレイション」を代表する催しであろう。筆者は地元の土佐絵金歌舞伎伝承会の絵金歌舞伎公演を鑑賞したが、プロの歌舞伎役者のように素晴らしい演技であり、感動した。土佐絵金歌舞伎伝承会は、絶え間ない稽古の積み重ねを通じて絵金歌舞伎の記憶を身体に刻み込みながら、絵金の集合的記憶を伝承する地元住民の団体である。『赤岡町史 改訂版』には土佐絵金歌舞伎伝承会の設立と活動の経過が詳しく説明されている。この伝承会活動の開始を告げる文章を引用しよう。

平成五（一九九三）年の第一七回絵金祭りでは、土佐絵金歌舞伎伝承会（杉村信夫会長）による絵金歌舞伎の初公演が行われた。土佐絵金歌舞伎伝承会は赤岡町に残る絵金の芝居絵屏風を題材に絵金を学び、描かれている芝居を実際に自分たちで演じることにより伝承する活動を行っており、絵金祭りでの初公演に向けて猛げいに励んできた。……呼び物の絵金歌舞伎初公演は、NTT 赤岡営業所駐車場に設けられた特設舞台で行われた。演目は「二月堂良弁杉の由来」。（赤岡町史編纂委員会 2009:691-692）

引用文に書かれているように、自分たちの町の誇りともいえるべき絵金の芝居絵屏風に対する強い敬愛の念が伝承会の活動として表れ、屏風に描かれた芝居の代表作「二月堂良弁杉の由来」

を見事に演じた。芝居絵屏風の展示に加えて、コメモレイションとしての絵金祭りの質を高めることになった活動の始まりといえよう。その後の伝承会の活動をさまざまな資料でたどると、絵金祭りにおける公演にとどまらず、海外や日本国内などで公演を続けている。1990年代末から最近まで、画期的な受賞例を含め、絵金祭り以外の場における主な活動を少しだけ列挙しておこう¹⁶⁾。

- ・1999年、フランスのリヨン市における第23回ジャパンウィークに参加し、モリエール劇場にて「浄瑠璃式三番叟」、「義経千本桜」、「櫓お七」を上演する。
- ・2000年、地域文化の向上と活性化に貢献した個人や団体に贈られるサントリー地域文化賞を受賞する。
- ・2003年、鳥根県出雲市で開催された「出雲阿国発祥四〇〇年 全国地歌舞伎交流大会」に招待され、また、翌2004年に横浜市で開催された「かながわドームシアター地芝居二〇〇四」に参加し、「二月堂良弁杉の由来」を上演する。
- ・2019年、香川県琴平町の金丸座で開催された「さぬき歌舞伎まつり」に参加し、「浄瑠璃式三番叟」を上演する。

ここでは紙幅の都合で2004年から2018年までの活動例を挙げることはできなかったけれども、1990年代前半に活動を開始してから、25年以上、さまざまな機会に途切れることなく日本の国内外で公演を続けている。日本では面積が最小規模で人口もかなり減少している町であるにもかかわらず、地元住民たちによる伝統的な歌舞伎芝居の質の高い伝承活動は驚異的である。芝居絵屏風に描かれた芝居の集会的な記憶を身体記憶として伝承するためには、子どもから大人まで幅広い年齢層の集団的な努力は欠かせない。そのことを象徴する記述が『赤岡町史改訂版』に見いだせる。

平成十四（二〇〇二）年の第二六回絵金祭りで一〇周年を迎えた土佐絵金歌舞伎は、赤岡のゆるぎない無形文化財として大きく深く根づいた。翌年秋には「絵金歌舞伎子ども教室」がつくられ、土佐絵金歌舞伎伝承会がその運営に当たった。赤岡小学校・赤岡中学校の児童・生徒からなる教室生は、平成十六年の第二八回絵金祭りでデビューし、「義経千本桜すし屋の場」を熱演した。（赤岡町史編纂委員会 2009:693）

芝居の伝承活動が大人たちだけの範囲にとどまっている限り、いずれ途絶えてしまうけれども、経験を積み熟練した大人が次の子ども世代を巻き込んで指導する体制が整うと集会的記憶の実践的な伝達が可能となる。その模範例のひとつが土佐絵金歌舞伎伝承会に見られる。幸いなことに、全国的にも注目されている絵金の芝居絵屏風の芝居という目標があり、2007年には、弁天座という立派な芝居小屋が復活し、地元で伝承する舞台も完備された。

(3) 絵金蔵

あまり広くない道路を挟んで弁天座の真向かいに、絵金蔵は一足早く2005年初春にオープンした。絵金蔵が開館するまでの道のりは必ずしも平坦なものではなく、1996年1月に絵金館建設構想委員会が発足し、高知県の貴重な文化遺産である絵金の作品を収蔵する「絵金館」を中心とする赤岡町のまちづくりの構想が話し合われた。2年後の1998年には、構想委員会から絵金館建設委員会という組織に移行し、そこでの協議の結果、町の財政規模や維持管理費などの点から大規模な施設は無理であるため、当面の課題として保管施設を建設することになった。絵金館の構想委員会の発足から約10年後の2005年、ようやく絵金館（絵金会館）、改め絵金蔵がオープンしたが、そのときの様子が『赤岡町史 改訂版』に詳しく報告されている。

平成十七（二〇〇五）年二月十一日、長い間の町民の念願であった絵金会館（絵金蔵）が本格的にオープンした。オープン前日の十日には町内外からの多数の参加者を得て落成式とともにオープニングセレモニーが行われ、神事に続いて祝いの舞「浄瑠璃式三番叟」や落成記念のもち投げで祝った。また、絵金蔵の前には出店が並んで「蔵市」が開かれた。運営にあたるのは、行政主体ではなく町民主体の絵金蔵運営委員会であり、協力を買って出てくれたボランティアのスタッフとともに、絵金蔵を町のシンボルとするための施設運営に乗り出した。

（赤岡町史編纂委員会 2009:666）

2002年1月25日の高知新聞の記事「土佐あちこち 絵金館」によると、「絵金館構想が初めて持ち上がったのは昭和五十八年。」であり、上記の引用文の絵金蔵オープンより22年も前のことである。さらに、2003年10月29日の高知新聞の記事「昭和初期の蔵改装 絵金館きょう起工 赤岡町屏風絵23点収蔵 来夏オープン」では、昭和7年に建設された土佐香美農協赤岡支所の旧米蔵を改築して2004年7月17日・18日の絵金祭りに合わせて開館する予定とのことであった。結局、絵金祭りには間に合わなかったが、町内外の多数の参加者の下で落成式、土佐絵金歌舞伎伝承会による祝いの舞「浄瑠璃式三番叟」などが行われ、出店も並んで盛大なオープニングセレモニーとなった。

いくたの紆余曲折を経て絵金蔵が出来上がったわけであるが、偉大な人物を記念・顕彰する場合には人物名を付けて、「〇〇記念館」、あるいは「〇〇資料館」になることが多いなかで、絵金記念館や絵金資料館ではなく絵金蔵という名称になったところに、地元赤岡町の人びとの独自の想いが込められているように推測される。筆者は絵金祭りとは別の日にも訪れ、見学したことがあるが、人通りの多い近代的な繁華街とは異なり、落ち着いた場所であって弁天座とともに絵金蔵の内部と外部はレトロな風情を創りだしている。絵画の専門家ではないから技術的なことは分からないが、傷みやすい芝居絵屏風を収蔵するためには、昔の米蔵もふさわしい建物のひとつかもしれない。前述の引用文によると、町民主体で絵金蔵を運営するとのことであるが、もちろん、絵画に詳しい専門家の方々も運営に参加している。

絵金蔵のオープンに合わせて刊行された『絵金蔵収蔵品目録』（2005年）、その8年後に刊行された『絵金資料調査報告書 第一集一芝居絵屏風Ⅰ―』（2013年）を拝見すると、実に緻密な

調査研究に基づき作成されており、学術的に高い水準の専門書になっている。絵金蔵の運営委員会は、後述する高知県立美術館、高知県の各地の美術館や資料館などとの連携の下で絵金の調査研究を進めてきたものと推測できる。

3 高知県立美術館の絵金のメモレション

赤岡町とともに、絵金のメモレションの重要な拠点となっているのは高知県立美術館である。筆者は絵金関係の資料を調べるために絵金蔵や高知市内の図書館（現在はオーテピア図書館）などを回った際に、何度か高知県立美術館を訪れたことがあるが、能舞台などを備えた立派な美術館である。1950年代から高知県に本格的な美術館を建設する構想はあったけれども、絵金蔵と同様に高知県立美術館も長い道のりを経て、ようやく1993年11月3日にオープンした。

(1) 高知県立美術館と絵金

1980年代まで、高知県立美術館の前身ともいえるべき役割を果たした施設は、1969年に開館した高知県立郷土文化会館であった。1970年前後の「絵金ブーム」の時代に、高知県内では絵金や弟子たちの作品が次々と発見され作品の価値が見直されたが、作品の所在地以外では高知県立郷土文化会館が保管するケースもあった。開館直後の1970年に「夏祭り絵金展」、そして閉館3年前の1988年に絵金の作品を含めて「館蔵美術名品展」を主催した¹⁷⁾。最終的に高知県立郷土文化会館所蔵の絵金や弟子たちの作品がどのくらいの数になったのか分からないけれども、高知県立美術館に受け継がれたものと思われる。

1996年11月3日から12月8日まで開催された「開館三周年記念展「絵金展」土佐の芝居絵と絵師金蔵」は、当時としては最大級の絵金展であり、図録の出品作品目録を見ると屏風絵、絵馬提灯、小襖、軸、白描など総数165点のうち高知県立美術館所蔵と寄託の作品数は23点ほどである¹⁸⁾。高知県内の団体や個人からの出品が大半を占めており、特に赤岡町と「絵金資料館」（絵金蔵以前の保管施設）が所蔵する作品の数が際立っている。高知県立美術館は「絵金のコレクション」の面では赤岡町と絵金蔵に見劣りするものの、芸術作品を展示できる舞台としては高知県では最も規模が大きく、絵金展についても最大級の展覧会を開催することができた。「開館三周年記念展「絵金展」土佐の芝居絵と絵師金蔵」は開館の「三周年の記念展」であり、絵金の生誕や死亡の年を考慮して100年後や200年後に開催する本来のメモレションではなかったけれども、美術館の学芸員と地元の絵金研究家が総力を結集して高度な内容の図録を作成している。その意味では、生没年にとらわれずに、絵金の偉大な業績を称えた顕彰のメモレションであったといえよう。

開館後の美術館の歩みについては、年に3回前後刊行されている『高知県立美術館ニュース』によってたどることができるし、これらの広報誌には、美術館がときおり企画し開催してきた絵金展の情報が掲載されている¹⁹⁾。高知県立美術館では、多様な絵金関係の展覧会を開催していることから考えると、美術館独自のマルク・シャガールのコレクションに劣らず、絵金と彼の作品は最も重要な位置づけを与えられている。

(2) 高知県立美術館主催の絵金生誕200年記念展

高知県立美術館が企画した、本来の意味での「絵金のメモレイション」は、2012年に開催された「絵師・金藏 生誕200年記念 大絵金展 極彩の闇」(10月28日～12月16日)である。200ページを超える大部な図録のカバーには、絵金の芝居絵屏風の彩色の基軸をなす「赤」と「黒」が全面に使用されている。図録の「はじめに」は日本語と英語の2ヶ国語で書かれており、英語では、“Ekin: The Variegated Darkness which commemorates the bicentennial of his birth” という文言を織り交ぜながら、企画展の趣旨とセールスポイントを説明している。1812年10月1日、土佐藩の城下新市町の髪結いの家に絵金が生まれてから、200年の節目に当たる年を記念して絵金の盛大な企画展を実施した。図録の「はじめに」は、絵金生誕200年記念展の「あいさつ」であり、絵金と弟子たちの作品に対する高知県立美術館の基本的姿勢を簡潔に表現しているの、少し長くなるが、重要な箇所を取り上げてみよう。

九六年の絵金展から十六年を経て、新たに所在が確認された作品がある一方、行方がわからなくなった作品もある。……本書は「大絵金展 極彩の闇」の図録であり、不出品作を含む二百七十二点を網羅し、絵金と芝居絵屏風にまつわる作品・文化を総集したものである。神社やお堂の夏祭りに奉納された芝居絵屏風は、金藏だけでなくその弟子、孫弟子らも手がけ、幕末から昭和のはじめまで長く描かれた。かつては毎年競い合うように新しい芝居絵屏風を注文し、古くなったものは処分していたこともあったようだ。……祭礼というハレの日を楽しむための消耗品的な役割も芝居絵屏風の一面であるが、近年は全国的に注目される機会も増え、高知の大切な文化として次世代に伝えていくべきものであることを再認識する気運も高まっている。(高知県立美術館 2012: 「はじめに」)

まず注目すべき点は、図録には不出品作も掲載されているということであり、巻末の作品目録の凡例には「出品されないものには◎を付した」と注意書きされており、◎を数えると約100点前後はある。もともと芝居絵屏風や絵馬提灯や白描などの作品自体が消耗品的なものであり、傷みやすいために出品を控えた所蔵家が少なくなかったのだろう。また、香美市立美術館では、ほぼ同時期に企画展「絵金生誕200年記念 絵金とその時代展」(2012年11月10日～12月16日)を開催したために所蔵の作品を高知県立美術館に出すわけにはいかなかった。

次に、図録は「絵金と芝居絵屏風にまつわる作品・文化を総集したもの」とのことであり、高知県立美術館が開館以来、他の関連団体や個人と協力しながら、絵金と弟子たちの作品を調査研究した成果を公表した報告書にもなっている。1996年における「開館三周年記念」の絵金展の図録も質量ともに立派なものであったが、16年間の調査研究の積み重ねを経て、鍵岡館長以外は執筆者の顔ぶれが変わると同時に、新しい視点と知見が加わり、図録はさらにグレードアップした印象を受ける。特に松島朝秀「芝居絵屏風の科学的調査」は、芝居絵屏風に使用されている絵具や技法について、エックス線やデジタルマイクロスコープなどの機器に基づき分析した斬新な科学調査報告である²⁰⁾。西洋絵画の分野でも世界的な名作が高度な機器を使って分析され、既存の知見を立証したり覆したりするケースが報告されている。松島の分析結果を

拝見すると、絵金の技能の素晴らしさとともに、絵金に関する既存の知見の多くが確認されたように読み取れる。

高知県立美術館が総力を結集して開催した「絵金生誕200年記念」の企画展は、絵金と弟子たち、および、地域の住民たちが築き上げてきた芝居絵屏風と祭礼の文化を忘れずに次の世代に伝承していくための画期的なコメモレイションであった。もちろん、絵金生誕200年に当たる2012年には絵金と弟子たち、芝居絵屏風の祭礼にゆかりの深い地域でも、それぞれ何らかの記念の行事が行われたが、今回は、紙幅の都合上、割愛する。

おわりに

2019年12月刊行の『神戸女学院大学論集』に掲載された拙稿「『絵金ブーム』の歴史社会学的考察」を執筆したときは、コロナウイルスの感染拡大の問題はまったく予想していなかった。2020年2月以降、世界各地でコロナウイルスの感染が拡大し、この原稿を執筆している9月になっても収束のめどは立っていない。新しい日常生活の様式が考案され、オンラインによる公私のコミュニケーションが奨励されている。そのなかでは現代の高度なメディア機器を使った映像や文字の情報が洪水のように世界各地に押し寄せ、生活全体が激しく変化し流動している。このような状況を考えると、どんなに衝撃的な記憶であっても速いスピードで風化が進んでしまい、知らない間に忘れ去られてしまうかもしれない。

本稿の前半ではコメモレイションの研究、記憶の社会学、フォークロリズム、伝統の創造の問題を検討したが、日進月歩するメディアと激動するグローバル化された社会を目のあたりにすると、どこまで有効な議論が可能になるのか、不安になる。本稿の後半で取り上げた現代の絵金のコメモレイションの重要な事例については、いずれも高知県の地域社会と美術館の関係者の絶え間ない活動と努力の結晶であり、敬意を表したい。2020年の芝居絵屏風の夏祭りはコロナウイルスの感染拡大の影響のため、残念ながら中止となってしまったけれども、来年以降も絵金と弟子たち、および、芝居絵屏風の祭礼文化を集会的記憶として地域ぐるみで、あるいは、美術館などの施設のネットワークで風化させずに、時代の変化に対応しながら伝承することを願っている。

注

- 1) 文献一覧の拙稿、小松(2019:2-16)を参照のこと。
- 2) 文献一覧の2編の拙稿を参照のこと。小松(2004:166-191)、(2005:104-133)。
- 3) 『記憶の場』は、アナル学派の研究で脚光を浴びたフランスの歴史学者たちが中心になって執筆した文化社会史的研究成果である。10年近い歳月をかけて刊行された、膨大な研究報告集『記憶の場』の序論と締めくくりの論文の日本語訳については、ノラ(2002)、(2003)を参照のこと。
- 4) 日本の「記憶研究ブーム」の先導役となったのは、主に日本の近現代史の研究者たちであり、明治以降の日本のナショナリズムや戦争をめぐる問題が焦点となっている。
- 5) 分子生物学や神経科学の記憶研究は心理学と連携できるかもしれないが、社会学や歴史学と接合することは容易でない。
- 6) アルヴァックスは集会的記憶論の最も重要な先駆者とはいえ、アンリ・ベルクソンの哲学的記憶論の批判的考察を通じて現代の分子生物学や神経科学のような記憶研究の領域まで接近を試みている。

- 7) 金瑛の著作はアルヴァックスの記憶研究の全体像を批判的に解明するため、近現代の人文社会科学の文献を同じく批判的に掘り下げて研究した成果であり、社会学における画期的な記憶研究として評価できる。
- 8) デュルケームは重要な基本概念を簡潔に定義しながら研究を進めているのに対し、デュルケーム社会学派の代表者であるアルヴァックスの著作には、最も重要な集合的記憶の概念を明確に規定している文章が見当たらない。現在の日本の社会学事典では、デュルケーム社会学とアルヴァックスの記憶論を研究した先達の大野道邦が、集合的記憶について分かりやすく解説している。社会学会社会学事典刊行会（2010:642-643）を参照のこと。
- 9) 社会的事実、集合表象、集合意識等の諸概念はデュルケーム『社会学的方法の規準』において用意周到に検討されたうえで定義され、分業、自殺、宗教、法律、道徳などの研究に適用された。残念ながら記憶の研究は社会学ではなく心理学の問題として割愛されたと伝えられている。
- 10) ベルクソンの記憶の研究は当時の「分子生物学や神経科学」の最先端の成果をも取り込みながら、彼独自の哲学的概念に立脚して進められている。ベルクソンの哲学とデュルケームの社会学を複眼的に見据え、構築されたアルヴァックスの集合的記憶論は予想以上の射程を備えているように思われる。
- 11) 民俗学事典編集委員会（2014:92）を参照のこと。
- 12) 社会学会社会学事典刊行会（2010:218）を参照のこと。
- 13) 日本民俗学会（2003）以外に、日本語の伝統と英語の tradition（トラディション）の関連について、西洋と日本の美術史の研究をしている辻成史が興味深い指摘をしている。明治前期は、tradition という英語には「伝説、言い伝え、伝承」などの訳語が使われており、現代のような「伝統」の訳語と意味が普及したのは、太平洋戦争が始まる昭和10年代になってからであるという。詳細は辻編（2003:72-73）を参照のこと。
- 14) 本物と偽物、真正性、伝統や民俗の変化に関する議論については、社会学会社会学事典刊行会（2010）、安村他編（2011）などを参照のこと。
- 15) 2018年の絵金祭りのときに収集したリーフレット『土佐赤岡絵金祭り』は、絵金の芝居絵屏風の特徴を表す赤と黒を基調とした鮮やかなものであり、「土佐赤岡絵金祭りへようこそ」は見開きの冒頭に出てくる丁寧な説明文である。
- 16) 土佐絵金歌舞伎伝承会は、絵金の芝居絵屏風に描かれている多数の芝居を上演しているが、高知新聞の記事などに報告されているだけでなく、近年はインターネット上の動画も掲載されているから、レベルの高い演技の様子を鑑賞できる。
- 17) 高知県立美術館が開館する前に、高知県立郷土文化会館は約20年間（1969年開館から）の使命を終え、閉館した。高知城の「正門」の外にあった郷土文化会館の建物は装いを新たに高知県立文学館として生まれ変わった。
- 18) 高知県立美術館（1996:168-173）を参照のこと。
- 19) 『高知県立美術館ニュース』は開館直前から発刊され、その時々美術館のイベントや美術に関連するエッセイや専門的な評論などを掲載しており、レベルの高い通信の役割を果たしている。
- 20) 高知県立美術館（2012:186-193）を参照のこと。

文献

- 阿部安成他編，1999，『記憶のかたち—コメモレイションの文化史』柏書房。
- 赤岡町史編纂委員会，2009，『赤岡町史 改訂版』高知県香南市赤岡町。
- アルヴァックス，M./小関藤一郎訳，1989，『集合的記憶』行路社。
- /鈴木智之訳，2018，『記憶の社会的枠組み』青弓社。
- ベルクソン，H./杉山直樹訳，2019，『物質と記憶』岩波書店。
- コナトン，P./芦刈美紀子訳，2011，『社会はいかに記憶するか 個人と社会の関係』新曜社。
- デュルケーム，E./宮島喬訳，1978，『社会学的方法の規準』岩波書店。
- 絵金蔵，2013，『絵金資料調査報告書 第一集—芝居絵屏風 I—』高知県香南市・絵金蔵運営委員会。

- 羽賀祥二, 1998, 『史蹟論—19世紀日本の地域社会と歴史意識—』名古屋大学出版会.
- 市川浩, 1983, 『人類の知的遺産59 ベルクソン』講談社.
- 井ノ口馨, 2015, 『記憶をあやつる』KADOKAWA.
- 岩本通弥編, 2003, 『現代民俗誌の地平3 記憶』朝倉書店.
- 岩波書店, 2000, 『思想 2000年5月号 特集 記憶の場』.
- 鍵岡正謹監修, 2005, 『絵金蔵収蔵品目録』高知県香南市.
- 金瑛, 2020, 『記憶の社会学とアルヴァックス』晃洋書房.
- 高知県立美術館, 1996, 『開館三周年記念展「絵金展」 土佐の芝居絵と絵師金藏』.
- , 2012, 『絵金 極彩の闇』grambooks.
- 小松秀雄, 2004, 「大老井伊直弼のコメモレイションの文化社会史(その1)」『神戸女学院大学論集』神戸女学院大学研究所, 51(2):166-191.
- , 2005, 「京都の平安遷都(奠都)記念祭と内国勸業博覧会の歴史社会学的再考」『神戸女学院大学論集』神戸女学院大学研究所, 52(1):104-133.
- , 2019, 「「絵金ブーム」の歴史社会学的考察」『神戸女学院大学論集』神戸女学院大学研究所, 66(2):1-16.
- 民俗学事典編集委員会, 2014, 『民俗学事典』丸善出版.
- 日本民俗学会, 2003, 『日本民俗学236号 特集 フォークロリズム』日本民俗学会.
- ノラ, P./長井伸二訳, 2002, 「記憶と歴史のはざまに」『記憶の場1 対立』岩波書店, 29-56.
- /工藤光一訳, 2003, 「コモラシオンの時代」『記憶の場3 模索』岩波書店, 427-474.
- 社会学会社会学事典刊行会, 2010, 『社会学事典』丸善出版.
- スクワイア, L. R., カンデル, E. R./小西史朗・桐野豊監修, 2013, 『記憶のしくみ (上)(下)』講談社.
- 辻成史編, 2003, 『伝統一その創出と転生』新曜社.
- 矢野敬一, 2006, 『慰霊・追悼・顕彰の近代』吉川弘文館.
- 安村克己・堀野正人・遠藤英樹・寺岡伸吾編, 2011, 『よくわかる観光社会学』ミネルヴァ書房.

(原稿受理日 2020年9月26日)